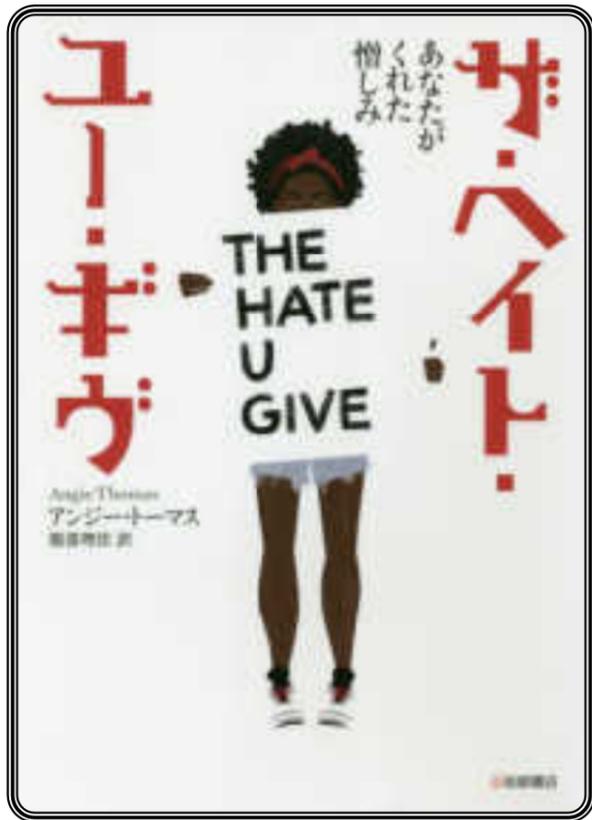


眞鍋由比

昨日、学校の印刷室に行ったら英語の原稿が落ちていて、米津玄師の歌「檸檬」の英語訳だった。この歌の「いまでもあなたは私の光」という一節が大好きなのだが、この『ザ・ヘイト・ユー・ギヴ The Hate U Give あなたがくれた憎しみ』アンジー・トーマス著 岩崎書店2018の主人公の名前もまた、父にとって自分の人生の唯一の希望の光と名づけられた「スター」。16才になる彼女は異母妹のケニヤに連れられて、春休みのパーティに来ていた。けれど、いきなり揉める音が聞こえて銃声をきいた彼女は、幼なじみだけど一年も話をしていなかったカリルの車に乗って逃げ出す。途中で警官に車を止められ、三度もカリルは身体検査をされた後、何気なく車の方に手を伸ばしたせいで、撃たれてしまう。何度も何度も。呆然として泣きさけぶスター。見る間にカリルは死んでしまった。武器も持っていなかったのに、警官の誤解で。

治安の悪い地域に住んでいるスターの家族は無理をして彼女とその兄弟を白人の学校に通わせています。白人の学校にいる間、スターはクールに礼儀正しく、賢い行動をとるよう心がけ、ボーイフレンドも白人。だから自分がその事件の目撃者であることを知られたくない。その事件の警官に抗議するデモをクラスメートが思いつき、実行しようとする。けれどスターは参加しない。理由が授業をさぼるためだから。「デモの趣旨を支持するが、動機に賛成できないから」という友人をみて感心するスター。白人だったからそのデモを支持しないと人種差別主義者と思われるだろうに。スター自身は黒人だから、参加しなければ白人に同調する裏切り者のような扱われ方をする可能性もある。この部分、なかなか黒人の自分の立場、白人の友人の立場などよく考えられていて、感動した。いつも黒人と白人の間に立たされる者だから敏感なのかもしれないけど、自分以外の立場の気持ちや考えが推し量れるのは賢く、強い。大人になってもそれをできるひとはなかなかいない。人種差別って結局、無知からきている恐れや怒りの部分が大きいと思う。

タイトルのThe hate u giveは歌の一節で、"The Hate U Give Little Infants Fucks Everybody"からきている。子どもに植えつけた憎しみが社会に牙をむくという意味。貧困のために学校にろくにいけない、売りたいくもないドラッグを売り、犯罪に巻き込まれて、まともな職につけないまま、犯罪者扱いをされて死んでいく。黒人に生まれたというだけで。そこからたまたま抜け出そうと、もがくカリル。スター。兄を殺されたらデヴァンテ。助けようとする家族、友人。理解しようとしてくれない友人。魅力的な人でも、あなたをよく考を理解しようとしてくれない人と付き合うのはよく考えたほうがいい。アメリカでは映画化もされていて、ポストグロブ・ホーンブック賞を受賞したベストセラーだ。今年の全国読書感想文コンクール高校の部の課題図書でもあります。黒人と白人の人種差別という日本人には身近に感じにくいかもしれない。けれど最近日本でもヘイトスピーチの話聞くようになってきた。何気ない会話のなかで在日外国人の人への軽いあざけりの含まれた言葉を聞いたりすることは昔もあってきた。けれど書店にヘイト本がずらっと並ぶ今は異常ではないだろうか？日本人はすばらしいけれど、他の国だってすばらしいところはある。お互いにいいところを真似するほうがずっと建設的だ。



SNSをやっていると異なる価値観の意見に触れずに済んで、自分の考えと似た人の「声」が反響して実際より多くの人の意見のようにかんじる現象「エコーチェンバー（反響室）」が起こるらしい。相模原の障害者施設殺傷事件でも被告の男の言動を称賛するコメントが目立ったように見えたが、実際は全体の4万分の1に過ぎず、男への批判や犠牲者を追悼する内容が圧倒的多数だったそう。どぎついついから注目されてしまう憎しみではなく、社会の共生を説くことばを増幅させたい。